



全国棚田(千枚田)連絡協議会

棚田ライタス

第55号 2010.7.30
(年3回発行)

発行／全国棚田(千枚田)連絡協議会

編集／ふるきやらネットワーク

〒184-0004 東京都小金井市本町6-5-3石塚事務所内

TEL:042-386-8355 / FAX:042-385-1180

<http://www.yukidaruma.or.jp/tanada/>



漁り火、そして海からの光が棚田に映える山口県長門市油谷の棚田。写真提供 山口県長門市農林課



棚田の力

特別対談



内山節 × 千賀裕太郎

(哲学者) (東京農工大学教授)

生き、これからどう生きていくのか？

内山節（哲学者）

千賀裕太郎（東京農工大学教授）

「自然と人間の共同体」を築いてきた日本

千賀・内山先生の近著『共同体の基礎理論』（＊1）を読み、日本の農村社会は「自然と人間の共同体だった」という記述に深い感銘を覚えました。私自身は仕事の上で農業水利に多くかかわり、特に20～30歳代は日本全国を回って、水とかわりながら生きてきた日本の農村の存在意義を肌で感じてきたわけです。

ところが、先生もご指摘のように、歐米の社会理論に基づいた「日本の村は古い封建制度に絡め取られているので、村を分解して『個人』を確立しなければならない」などという言説がちまたに多く、日本の農村社会をどう評価すべきか長いあいだ悩んでいたのです。

しかし今回、日本の農村は封建的で歴史的に見て遅れているとか、いないとかといったモノサシでは測れない、というご指摘に、目の前の霧が晴れました。内山・欧米の理論では、たとえば「村」

といえば人間の村ですよね。「町」も人間の町。それに対して、日本は「自然と人間の村」、「自然と人間の町」。集落の場合は「自然と人間の集落」なんですね。

社会観の根本が全然違いますから、比較すること自体が間違っているんです。ですから「自治」も、欧米は人間だけの社会ですからやりやすい。日本は自然と人間の社会の自治ですからややこしい。また、キリスト教社会では人間は死んだ後、天国か地獄か、いまの世界から離れますよね。でも、日本の場合は死んだ後も魂は村に残る。ですから、日本の自治は死者も含めているんです。

つまり、「自然を含めた自治」、「ご先祖様を含めた自治」ですから、会議を開いても来てくれない人たちが構成メンバーです。そうすると、人間同士の議論では不十分で、たとえば、祭りを使ってご先祖様や自然の神様を降ろす。これもまた自治の仕組みです。日本は、地域でたえず行事を繰り返しながら、人間の場を再創造してきた。こうした自然や死者も

含めた村のあり方ができていないと村の力は、本当はできてこないと思いますね。

千賀・日本の場合アジアモンスーン地帯にあり、アジアや欧米の大陸地域に比べて自然の変動幅が大きいですね。日本列島の地形が細やかに発達していることで自然の変動幅が大きいですね。日本もあつて、決定的に破壊的な自然ではなくたたとはい、雨、気温、風にせよ、短い周期で予想を超えて変動する自然と

うまく折り合いをつけながら生きてきた。だから日本では当然、祈りも必要になつてくる。今年もなんとか作物が良く育つてほしいと祈る。そして、災害から自分たちを守る共同の精神も育つた。旱魃時には、集落内での農業用水の公平な配分にも心を配った。こうした点が欧米と日本はすいぶん違う気がしますね。

内山・ええ。古代でいえば先進文明地だけでも心を配った。こうした点が欧米と日本はすいぶん違う気がしますね。

うちやま たかし

1950年東京生まれ。哲学者。都立新宿高校卒。1970年代から群馬県上野村と東京を往復して暮らし、現在、立教大学や東京大学で教鞭をとる。近著に『共同体の基礎理論』(農文協)、『怯えの時代』(新潮社)、『日本人はなぜキツネにだまされなくなったのか』(講談社現代新書)がある。



（＊1） 「共同体の基礎理論」

共 同 体 の 基 础 理 論
著者 内山節
出版社 朝日新聞出版

未来社会を模索する
<新たな共同体論>の誕生

内山節著。2010年農村漁村文化協会刊。今まで1955年に大塚久雄著の同名の書籍が「共同体」を学ぶ教科書になってきたと指摘。欧米の理論ではなく、日本に根ざし、現在の「まなざし」に沿った「共同体論」が展開されている。自らの農山村暮らしで得た経験を踏まえ、日本の共同体にあった精神を歴史のなかから紐解き、明日へつなげた一冊。

近代化が水への意識を変えた

千賀・日本で河口部の干拓や低湿地の水田化などの水利事業が展開していくのは江戸の中期以降ですね。それまでは、山ひだに囲まれた小さな流域や、わずかに標高の高い洪水被害の少ない場所を選んで集落を営んできました。そういう状況が長かったわけですよ。

とりわけ明治以降、大河川下流域に大きな治水事業や農業水利事業が入ったあたりから日本人の意識が、国も含めて相変わっていったのだと思います。それこそ近代化がはじまるわけです。

それまで日本人は日本人なりに自然の変動を自分たちで意識的にコントロールして農村社会を営んできた。けれども近代化のなかで巨大な技術や生産力が覆い被さると、自治能力、つまり自分たちのまかないを自分たちが共同でする能力を

せんが ゆうたろう

1948年北海道生まれ。東京大学農学部卒。農林省、宇都宮大学を経て東京農工大学大学院教授・連合農学研究科長。専門は農村計画学、水資源計画学。主な著書に『水をはぐく』(農文協)、『よみがえれ、水辺・里山・田園』(岩波ブックレット)、『水資源管理と環境保全』(鹿島出版会)、『農村計画学』(農業土木学会編、共著)がある。



失つてしまつた。あるいは、それができることすら忘れてしまつた。

日本には、まさに意識も含めて自然と人間が共存している、すばらしい農村集落が無数にあつたけれども、非常に速いスピードで崩壊していった。自然の制御はもう他人がやってくれる近代技術がやつてくれるんだといつて自治の力を“放り投げた”そんな感じですね。

内山・水は下に流れるもので上に流すことはできないですよね。上に持つていく

としたら、桶で汲み上げるだけだった。それが変わったのが明治以降の揚水ポンプの技術ですね。しかも安定的に上に持つてこられるようになつたことは人の意識に相当影響していますね。

千賀・ええ。日本をはじめとする水田地帯ではもともと意識的に水を横に流すことをやつてきた。黙つていたら水は当然下へ勢いよく流れいく。スキーディえば直滑降。最大傾斜線をたどりながら流れしていく。それだとあつという間に海に辿り着いてしまつ。なるべく横へ、斜滑降で流す。それが水田をつくる用水路であり、治水でもあつたわけです。それは弥生時代から続き、まるで毛細血管のように国土に水路が張り巡らされてきた。

戦後は排水機場の登場も大きかつた。

今まで水に浸かった芦原が一気に美田に変わる。美田になるだけならいいのですが、社会の経済力が大きくなるにつれ、「宅地にすればもっと儲かるぞ」という話になる。それが田中角栄の政策でした

よね。水の底だった場所が宅地となり、まさに水底から金を掘り出したわけです。

私はドイツでも短期間ながら暮らしましたが、ヨーロッパでは、ある意味で地域の土地や自然を自分たち共同でコントロールし、まだ互いにつながつているんです。日本とは違つた自然観です。そこでは畑で穀物をつくるため、水田と違い「連作障害」があつたのです。そこで、輪作する三圃式農法が8～19世紀のあいだ千年ぐらい続きました。

村では毎年春に集落全戸の代表者が集まって、今年はどこを休耕地にするか、夏作地、冬作地はどこにするか、集落の全耕地を3区分した土地の利用方法と各農家が耕す場所をみんなで決めてゆく。要するに土地利用計画と換地計画を毎年春に農家がみんなで決めてきた。それを千年ですから千回繰り返したのです。

これが19世紀には耕地整理法として制度化され、都市計画の法制度へとつながつてきます。また集落の土地は個々人の「私有の土地」ではなく「共同の土地」だという意識も育つたと思います。だから自分たちの地域の土地利用を自分で計画する習慣や制度の基礎が、ヨーロッパの農村や都市では18～19世紀ぐらいままでにできたと私は思っています。

日本では、明治維新後にドイツから耕地整理法を取り入れ、区画整理もはじめました。ただ、それ以前の時代にみんなで土地の利用計画をつくることは、水田の場合、洪水常襲地などのわずかな例外

を除いて基本的に必要なかつた。水田は本当に優れた農地で連作障害が起きませんから同じ場所で百年でも千年でも米をつくるわけです。

ですから、残念ながら日本では土地利用計画意識が十分に育つ条件がなかつたと私は見ています。そのことが、近代化が大きく進むなかでの日本の、あるいはアジアの水田農業地域に共通した、土地の所有と利用をめぐる大きな弱点だと深く自覚しなければならないと思います。

内山・日本の村では水利用が、自動的にある種の枠をつくってきたんですね。水というのは「水がある」と「使える水がある」というのでは違う。谷底をいくらたくさん水が流れている、その上に住む人には使えない。かなり上方から用水を引く必要がある。当然ながら使える水の量は決まっていて、使える水の量がこれだけだから栽培面積はこれだけという枠も自動的に決まるわけです。

だから共同の農業用水を使う限り、一人がいきなり100haの水田をつくつても、使える水がないですから、結果として村のありようが決まつてきた。これが戦後、慣行的な水利からダムなどの水利に切り変わつたことで水が無尽蔵に使えるといった発想になつていく。制約が飛んでしまつたわけです。

千賀・おっしゃるとおりですね。私も20歳代に農水省でそういう仕事をしていました。ただ、それ以前の時代にみんなで土地にすればもっと儲かるぞ」という話になつた。それが田中角栄の政策でした

「耕して天に昇る」撮影：齊藤明義
撮影場所：島根県柿木村（現吉賀町）



農業水利の社会は、時に水をめぐつて反目し合い、しかし他方では必ず協調し合う独特的の社会だったのが、ダムができる途端、水という共通の資源制約がなくなり、水争いが解消されると同時に、人と人の協調関係も緩んでいったのです。

確かに一方で農業水利事業は、地域における水に関する不平等、差別をなくしていました。それは地域に幸せをもたらすことでもあったのですが、大切な共同体の絆は消えていった。

内山・ええ、近代化の過程で何か問題だとすれば、近代の発想は何かやつたら、良いことばかりで苦労は全部解消できてしまうと考えたことです。でも、必ず悪い面もある。そう考えなければならないんですね。そこで、まさにどういうバランスを取るか。それによって、どちらが大事かも変わってきます。

千賀・そうですね。1960年代後半、70年代にかけて、日本中にため池がたくさん残っていた。そのころ「ため池征伐」というのがある種の国策としてありました。「あれを征伐すれば、どれだけ農業の労働生産性が上がるだろう。しかもため池を埋め立てれば土地が生まれる」と、地元もそれを希望していた。ある一面だけを見て、良いことだとした時代がありましたね。

内山・北海道の釧路湿原の方で、1956年から林野庁が大国有林の整備事業をやつたんです。そのときに使った言葉が「湿原退治」だったんです。

千賀・極端ですよね。

内山・釧路湿原の大元を退治してしまつて、湿原がやせ細つていくのは当たり前です。いまは湿原保全だといいますが、わずか50年前には、湿原退治に燃えた時代があつたんです。人間の偉大な力で自然を制圧するのが夢として語られていた時代だった。その時代は、人間の生き方としては、結びあう生き方が「封建的、古い」というイメージとダブっていて、自立した個人が良いとされていた。いま、

こうした時代の影響が大きいですよね。

千賀・そうですね。私は団塊の世代ですから、高校・大学のころに、「自立した個として強くあらねばならない」などと煽られ、しかし「ひとりで生きてゆけるわけがないのに」と不安や疑問を抱えてかなり悩んだ時期がありました。

内山・しかもあの時代、日本人が弱い個人だから、日本の社会が近代化しないのだといわれましたし、戦後は、精神改造をするために、あいまいな日本語を使わず、フランス語を日本の公用語にしようと議論までなされたほどでした。

しかし、個を追求してきた結果、いま人間同士バラバラになりすぎて、どうにもならなくなつた。結びなおしの大切さに気づき、もう一度、都市も農村もどう結びなおせばよいか考えていく時代ですね。自然、歴史、文化、いろんな結びなおしがある。「個の自立の時代」から「結びあいの時代」へと変わつてきました。

結びあいの時代へ

いう時期もあるでしょう。だけど、そこから派生して生まれた景観や和みの方が大事だという時期もあるんですよ。

千賀・風向きは変わつてきました。ただ、棚田地域は経済的にはたいへんですよね。内山・もちろん棚田自体は生産性や収入からいえば、使った労力の方が大きい。ただ、棚田の生産から発生する地域景観やオーナー制の宿泊などもあるわけです。旅館や民宿が潤うだけでなく、泊まること自分が地域の人との交流でもあり、経済外のプラスもある。ここから地域のものを買う人が出るなど次につながる。いろんなものを含めて、全体として経済を考える仕組みをつくらなきやならない。



千葉県鴨川市大山地区で行われる雨乞いの夏祭り。
写真提供：大山千枚田保存会

棚田オーナーで賑わう静岡県松崎町石部の棚田。
撮影：松崎町企画観光課 山本 公

だのにいま、個別の企業経営と同じようになっているんです。個別企業だと棚田は収入は少ないので労力を使うばかりという話になる。地域資源でありながら、個々の農家もなんとかやつていける仕組み、経済が必要です。その経済をどういう想像力でつくるか。これができると、そこに加わる人たちのいろいろな形も出てくる。労力で加わる人も場合もあれば、お金で加わる人も出てくるでしょうし。

千賀：これまでも、そしていまも、地域をどうするのかという難題に対して、行政もそれぞれの部局が担当する個別の経済しか考えていないですね。いまいわっている戸別所得補償もそう。米をつく

つて、その足りない分を補償しますといつても、わずか3~4反分の補償をしてもらっただけでは、家族として生きていくしかない。その地域で子どもを育て、世代を超えて生きていける所得を確保できる地域経済全体をどうつくるか。それを考えていかなければならない。

「農村計画」という総合的な発想で地域をデザインすることが必要です。地域のいろいろな資源を総合的にどう使うかを考え、食料生産だけではなく、再生可能エネルギーの生産、グリーンツーリズムや地場産のものを加工して売り出す手立てを生み出す。これはもちろん、地元の人々も地方自治体も国の政府も、都市の人たちも、みんなが共同して実行していく必要がある。

特に行政は、都会とは歴然と地域格差のある教育や医療、福祉などトータルとしてそこに住める条件をどうつくるか考えねばならない。それを都市の人も十分に理解し、そこに税金を使うことに賛同しなければならないですよ。

内山：いま、村の農家が中小企業団地のような発想でとらえられているんですね。中小企業団地に仮に100社あっても1社ずつが勝手に経営していく、破綻する企業が出ればそれで終わり。つまり、農家が個別に経営していく、みんながつながって生きるという仕組みになつていなければなりません。この方向でしかやらなかつたことが大きな失敗じゃないでしょうか。農家1軒あたり500万円あればなんとかなる。

そんな計算ばかりやつてきたわけです。このやり方ではもう無理なんです。

世界的に変動していますから個別経営で農家が勝手に競争しているのでは、世界の競争に勝てない。中国が日本向けに安全に配慮したものをつくりはじめ、「意外と安全」なんて話になると堰を切りますよね。

内山：うちの村（上野村）は人口140人ですが、年間観光客数が日帰りも含めて20万人なんです。人口からするとものすごく多い。ゴルフ場があるわけでもなく、何もないから良いといった交流型の人が多い。どういう仕組みをつくれば、この20万人が本当の意味で村を支える20万人になるか。おそらくこの半分は仕組みがあれば、村を支えることが喜びだという人たちだと思つんですよ。

双方がそれを望んでいるのだから、村側も民宿に何人入ったというだけではなく、地域全体でどういう役割を果たして

千賀：こうした気持ちや気分を実際の経済に変えていく必要があるんですよ。交流型の経済というのはお金を取れる対象が限られている。「美しい山を見ました」、「はいでは、お金ください」。「美しい田んぼを見ました」、「はいでは、お金ください」とはいかないでしよう。だけど、村へ来ればものも食べるし、土産も買うし……。そのとき、外から仕入れたものを売るのかで、まるで地域経済は変わってしまう。それができるかどうか。景色だけでお金は取れない。でも、景色があるから、人は来るという関係。ここがグリーンツーリズムの経済のおもしろいところなんですね。

内山：経済というのは、入ってきたお金をいかに時間を長くかけて出すかが大事なんです。仮に毎月村全体に1億円入り、みんなが買い物に出たりして毎月1億円出て行くとします。でも、そのうちの1千万円を村のなかで回せば、翌月は1億





域で公務員を使うべきだと思いますね。

たとえば、京都府の美山町では公共の建物の木造化を進めていて、コンクリートの場合と木造を比較したんです。コンクリートの建設費の方が2千万円程度15%ほど安かったです。しかし、木造の方が地域内で材料を買ったり、地域内に賃金を払うなど町内への発注率が70%にも上る。ところがコンクリートだと35%と半減。1千万円になる。10%ずつ増えていけば、長期的にはえらい違いになる。

何年か前、うちの村で気がついたら、鶏を飼っている農家が1軒もなかつた。だから僕は「だれか鶏を飼つたら?」といつてはいた。村のみんなが地域の卵を使えば、1軒ぐらい暮らせるはずだつて。

それを外から買って来るから、みすみす1家族が生活できる基盤を外に出していく。結局、養鶏農家はできなかつたけれども、数羽飼う人が10軒ほどできて、道の駅に置くなど村で卵が調達できるようになつた。卵の質も良くなつてね。

千賀・そういう集落全体の経済のデザインをだれが企画するのか。今までだれもしていない。行政の担当者は、事業として予算化されていないと仕事はないと思つてしまふんですね。給料をもらつていること自体が、予算化されていくなくて仕事としてやる義務があるのでです。

「ゼロ予算事業」として予算がついてなくてもどんどん事業化している、進んだ町村行政もあります。もつともつと地

域で公務員を使うべきだと思いますね。

たとえば、京都府の美山町では公共の建物の木造化を進めていて、コンクリートの場合と木造を比較したんです。コンクリートの建設費の方が2千万円程度15%ほど安かったです。しかし、木造の方が地域内で材料を買つたり、地域内に賃金を払うなど町内への発注率が70%にも上る。ところがコンクリートだと35%と半減。その差を考えると2千万円高い建設コストでも十分に元が取れる、と役場の人があないう発想で地域の経済全体を企画運営していくような主体が必要ですね。

さらにまた、再生可能エネルギーを大量に生産できる潜在可能性を持つているのは農山村。ドイツでは、小規模でも再生可能エネルギー(電力)を生産した事業主から、電力を高価定額で全量買い取ることを大手送電事業者に義務付けています。この効果は絶大で、農村地域は、農業生産とエネルギー生産を連動させた新産業の場として再活性化しつつあります。これを「農業・農村の再定義の時代」の到来といつてよいと思います。

内山・いまの時代、ガソリンも電気も使つては到底無理な話ですが、地域循環できるものまで外に出している。これからは地域循環できるものは地域で回して、外の力を借りてきて地域循環を増やすという発想です。外の力に頼らざるを得ないものも当然ある。棚田などもそう。どのよ

うな形で外の力を借りるか、経済も同じ。地域循環がうまくいくようにその仕組みを考えていく。まさにデザインですね。

千賀・ええ、棚田のある農村はその点、

主食の米があるわけですよね。ベーシックな条件としては最高の条件ですよ。都市の人があつてきくなる魅力ある地域市の人があつてきくなる魅力ある地域循環をどうつくるかですね。

内山・いま、村を維持しようとすると、

都会の人とどういう結び方をするか、つながりをどうつくるかが一番の要になつ

てきてますね。農村振興の柱といえま

す。助け合うことが絶対に必要です。た

とえば、農産物流通もつきあいのある人

に直接買ってもらう。また地元で生産者

の顔が見える直売所などをつくる方法も

あります。

地域文化も同じです。集落によつては都会の人に御神輿を担いでもらつたり。

うちの村では、高齢化でみんなが入れ歯になつてきて笛が吹けない。神社に獅子舞を奉納するのですが、真剣を使います。

実は、笛の音で面をかぶつた踊り手たち

にシナリオを伝えている。ですから、笛

が途中で音が出なくなると危険なわけで

す。いま、都会から来た若い人が一生懸命笛を勉強しています。彼らもずっと村

にいるかどうかわからない。でも、笛の必要なときには必ず来ます、と。こうし

たかわり方も重要なですね。

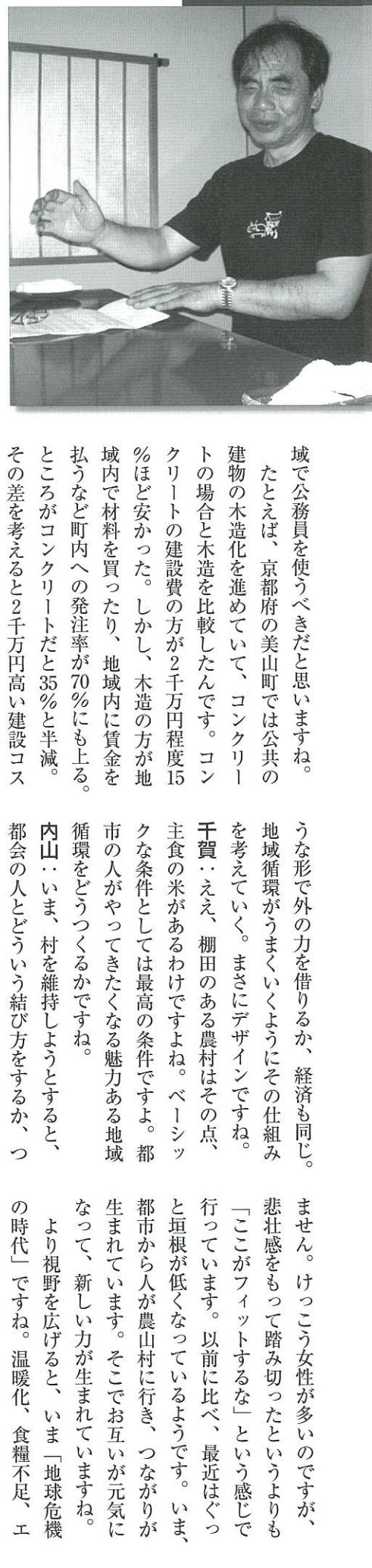
千賀・うちの大学の学生も農山村に入つて、そのまま住みみたいと思う人が増えています。実際に住み着く人も少なくありません。けつこう女性が多いのですが、悲壮感をもつて踏み切つたというよりも「ここがフィットするな」という感じで行っています。以前に比べ、最近はぐつと垣根が低くなつていています。いま、都市から人が農山村に行き、つながりが生まれています。そこでお互いが元気になつて、新しい力が生まれていますね。

より視野を広げると、いま「地球危機の時代」ですね。温暖化、食糧不足、エネルギー枯渇、生態系劣化……おもしろいことにいざれをとつても農村地域こそがこの地球危機を解決する場として豊かな条件を持っています。問題は、国も地域もこのことを自覚するかどうかです。

「農村丸」という帆船が強い追い風を受けて前に進むには、帆の向きを早急に修正する必要があります。そうすれば、地球危機を農村にとつての「神風」とすることが可能となるし、またそのことこそだからも期待されることだと思います。

千賀・うちの大学の学生も農山村に入つて、そのまま住みみたいと思う人が増えています。実際に住み着く人も少なくありません。けつこう女性が多いのですが、悲壮感をもつて踏み切つたというよりも「ここがフィットするな」という感じで行っています。以前に比べ、最近はぐつと垣根が低くなつていています。いま、都市から人が農山村に行き、つながりが生まれています。そこでお互いが元気になつて、新しい力が生まれていますね。

ません。けつこう女性が多いのですが、悲壮感をもつて踏み切つたというよりも「ここがフィットするな」という感じで行っています。以前に比べ、最近はぐつと垣根が低くなつていています。いま、都市から人が農山村に行き、つながりが生まれています。そこでお互いが元気になつて、新しい力が生まれていますね。



「棚田の力」一言集

棚田は命の源
動植物の楽園
地域文化の発信基地
守るべき国の宝です！

大石惣一郎（新潟県佐渡市）個人正会員
棚田には、人を癒す力があると思います。
それは棚田と自然と人が一緒に作り上げた風景だからだと思います。文化的景観とはまさにそだだと思います。

我々の文化的景観である棚田を、これからも保全してゆきましょう。

酒井英次（新潟県新潟市）個人賛助会員

棚田は私にとって「持続するエネルギー」の源泉です。何世代もかけて棚田を築いた先人たちに鼓舞されます。

岸 康彦（千葉県柏市）個人正会員

棚田は持続可能な社会のシンボル的存在である。
この棚田を健全な形で次世代に引き継がなければならぬ。

安井一臣（東京都練馬区）個人正会員

棚田は母なる自然と人間の厳しい合作！美しい表面と、水源確保、暗渠の工夫、絶え間ない土砂崩れや蔓延る雑木雜草との辛抱強い斗いの歴史。

先人達の労苦を偲ぶ時、限りない敬愛と民族の将来に誇りと自信を抱かせて頂く。

高木宏明（東京都調布市）個人正会員

回想「棚田が持つ力」「多くの生き物と戯れながら、蓮華カーペットを敷きつめた春の棚田に級友と寝ころび、夢と友情と命の大切さを育んだ少年の日々。」

—歳月を経て、今も農にいそしむ丹波の老友と酌み交わす、年に一度の故郷への旅

吉田忠文（東京都東久留米市）個人正会員

—歳月を経て、今も農にいそしむ丹波の老友と酌み交わす、年に一度の故郷への旅

棚田にはすべてのいのちを癒しながらいくしむ ちからがある

鈴村 直（岐阜県恵那市）個人正会員

5 / 15 オーナー田植
5 / 17 小学5、6年田植
5 / 22 オーナー田植

手植で田植を手伝いました
私の小学生のころ（S22～S25）

苗代田より植とり（成苗5苗）
植くばり、田植のころを想い出させてくれました。

河合哲玄（岐阜県恵那市）個人賛助会員
棚田の力 大地に響け 棚田の力
世界に響け 棚田の力
棚田の力 生きる喜び
棚田の力 人と人との絆
棚田の力 万物の命
棚田の力 明日への財産

棚田の保全に関わって15年。棚田バースツアーフラマ祭り、「越後妻有アートトリエンナーレ2009」といった棚田での芸術祭出展。

棚田にはまだ可能性があります！

相田 明（岐阜県可児市）個人賛助会員
棚田にはまだ可能性があります！

日本原風景はアジアの原風景、棚田には、アジア、世界と日本をつなぐ力がある。

安藤和雄（京都府京都市）個人正会員

①景観が美しく農作物が美味しい……

そんな棚田を開拓した先人達や、今も守り続ける人々の労する姿は私のエネルギー源となる……それが「棚田の力」
②棚田を開拓した先人達や、今も農作物を勞して育み続ける人々の姿は、私の心に「棚田の力」となって響き続けている。

山本 一（大阪府茨木市）個人正会員
ここ3年に棚田百選のうち九州北部・山口・岡山・愛媛の28ヶ所に行きました。そのうち3割はアクセスの不充分で行きづくに困りました、また2、3ヶ所については崩壊寸前でした。

多くの棚田は地域全体の活動で維持・耕作されており、わたしたちの目・耳・鼻を一年を通して育んでくれます、また口には美味しいものを提供して体に活力を与えてくれます。
今後も幾ら遠く、観られるか分かりませんが探訪します。

四国ではちょっと郊外に出ると棚田は何処にでも開かれている。今後は埋もれた(知られない)棚田の紹介に微力を尽くしたいと願っている。

井沢忠藏（徳島県徳島市）個人賛助会員

うきはの、「つづら（葛籠）の棚田」はそこに住む先人が、今日まで嘗々ときずき上げて頂いた、うきは市が誇る棚田百選の棚田。(うきは市には2つのダメがあるが、市民のための保水の第3の棚田ダム。このつづらの地で活動できることが、誇り。この地で年1回開催の「棚田」(うきはは彼岸花めぐら祭り)のパンフレットにこんな言葉を書いています。「何もない山里です。手を加えない自然の美しさとそこに暮らす人々のやさしさをお持ち帰り下さい。」この言葉は先人に感謝、活動できる感謝、来て頂いた方々に感謝。

私は活動の原点が棚田、この棚田の言葉が私達の活動の中心テーマですし、棚田から頂いた言葉として感謝し、頑張って活動をつづけさせて頂いています。力を頂く棚田。

関 健児（福岡県うきは市）個人賛助会員

ここ3年に棚田百選のうち九州北部・山口・岡山・愛媛の28ヶ所に行きました。そのうち3割はアクセスの不充分で行きづくに困りました、また2、3ヶ所については崩壊寸前でした。

多くの棚田は地域全体の活動で維持・耕作されており、わたしたちの目・耳・鼻を一年を通して育んでくれます、また口には美味しいものを提供して体に活力を与えてくれます。
今後も幾ら遠く、観られるか分かりませんが探訪します。

入江英之（長崎県諫早市）個人賛助会員

あなたにとつての「棚田の力」とは？

～全国棚田（千枚田）連絡協議会個人正会員・個人賛助会員のみなさんから～



棚田オーナーが感じた 棚田の力

～棚田保全活動に、本当に必要なこと～

大山千枚田オーナー会長 向笠 功一



民泊先の古民家農家(築150年)で柴崎ご夫妻に挨拶されたミュートンさん(右)と奥様のニウタさん(左)



左から仲間の萩野さん ブラジルから来たミュートンさんと私

私は12年前より千葉県鴨川市にある大山千枚田の棚田オーナーをしています。オーナーになる前は農業問題や棚田の保全活動についてかかわったことがなく、毎週鴨川で農作業を行ったり、棚田サミットに参加するとは予想もしませんでした。

鴨川の棚田保全活動はNPO法人大山千枚田保存会、鴨川市、鴨川自然王国の3つの組織が行い、私がオーナーをしている大山千枚田はNPO法人大山千枚田保存会（以下保存会と記述）と鴨川市がオーナー制を始めました。

保存会は棚田オーナー制のほかにも棚田トラスト、酒米オーナー、綿藍オーナー、大豆トラストなどを行っています。また団体オーナー、小学生の体験、学観察会、祭り寿司体験など活動を広めています。

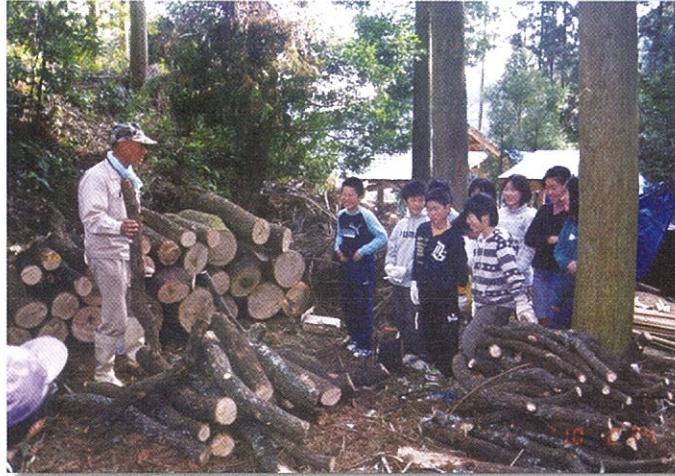
各地の村おこしや棚田保全活動の目的は地域の活性化や棚田の自然を残すことですが、これらは当然として鴨川での保存会活動は少し違った活動だと思います。愛知県の四谷千枚田に行つた際、地元の連谷小学校の子供達が「棚田の保全活動は観光化や稻刈り体験などですが、本当にそれだけで良いのでしょうか?」と真剣に質問してきました。回答に詰まつた私は帰つてからも考え続けましたが、新らためて鴨川の活動を見ると都会の人達と農村の人達が棚田を通して交流を深め、農業問題を真剣に考え「単なる地域の活性化ではなく都会の人や農家の人が棚

田保全活動を通して生きがいを見つけるに仲良く生きていく」活動だと思います。鴨川に来る都会の人は休日に農作業を楽しんだり、鴨川に住んだり、オーナー点としたり、鴨川に別荘を持ち第2の拠点から一歩も二歩も踏み込んでいます。農家の人の達も今まで家に閉じこもっていたのが活動を通して色々な人に会い、広い視野で農業問題に関心を深める様になりました。私も保存会の人達と交流する様になつたお陰で棚田の美しさだけでなく農村が抱えている様々な問題にも関心を持つようになりました。

私は多くの人にこの楽しさを知つてもうう為、大山千枚田に会社の仲間や外国人の友人達を連れて来ます。先日はブラジル人の夫婦が築150年の古民家に農家民宿をして田植え体験をしました。民泊先では彼らと農家の夫婦で話が弾みました。

鴨川でも高齢化の問題が起こっています。借りている地主さんが亡くなり、85歳の奥さん一人で稻作をしなければならず耕作をやめました。その田んぼをオーナー仲間と借り、耕運機で耕すことからはじめました。5月15日には助つ人の応援も貰つて田植えを行い、昼前には完了しました。

「棚田保全活動は田んぼを守るだけではなく、農家と都会の人と共に生きがいを感じる場にしていく」ということを連谷小学校の子供達に回答したいと思います。



「棚田の力」を 山びこがこだまする 自然学校に生かして

熊本県南関町
山の元自然学校代表

林田 弘治

南関第二小学校五年生「ふるさと自然体験学習」をはじめ、山の元自然学校の活動は、まさに山や棚田のなか



熊本県南関町は、県の最北端に位置し、山の元自然学校は南関町の西部を占める農山村地帯、三池山（久重山）388mの中腹にあります。ここで棚田米を生産し、自然農を営みながら自然学校をはじめで今年で12年になります。

山の元自然学校の約10haのフィールドは周囲を山々に囲まれており、山びこがこだまし、地球の鼓動を感じる幻想的な場所にへ地球村学びの森（炭焼き小屋・東屋・トイレ・遊歩道・宿泊所）を完備し、森林環境教育や汗腺を通して自然環境学を行っています。地元の南関第二小学校からは地域学習協力員を嘱託され、子どもたちに森林や沢、棚田等の教材を活用し、棚田の機能や森林の働き、土、植物、生物のさすなまで伝えています。

そのほか、50年前の生き方再現というテーマで百姓体験研究生を受け入れ、先人の知恵と工夫の素晴らしさを伝え、「汗かけば土が答える」と教えています。遊歩道散策、椎茸駒打ち、藁草履やしめ縄づくり、炭焼き、竹炭を活用した水の浄化、竹炭米つくり、棚田コラボサート等、自然環境学習が満載の学校です。

そして、宿泊施設ログハウスでの交流会、里地里山に生息する野鳥や田んぼの生きものとの触れあいはなんともいえない癒しです。

このほか、自然学校の棚田で収穫する「嶽の冷泉米」を通じた全国のお客様との交流もあります。こちらは今年で18年目を迎えました。「棚田米の出来具合はどうですか」といった問い合わせや「お疲れ様。元気で頑張って下さい」という

手紙や電話をいただくなには、この上ない心の励ましになります。

また、地元の小学生、宿泊体験者や沖縄、北海道釧路、熊本大学教育学部の学生、そのほか研修生たちからの感想文や手紙は何よりうれしく、里親の気分で棚田保全活動の苦労もう吹飛びほどです。

たる5月28日には、沢の源となる山上の池のお祓い・祈願を地域のみなさんとともに行いました。山上の池は、先祖が久重山に降った雨をこの池に一時保存し地下浸透させ、長山川水系の水源として利活用してきた貴重な文化遺産です。自然学校内の棚田も7反あり、1日に約700tの雨水を地下浸透させる機能を持っています。その水源となる山上の池の改築を機に、自然の神に見守っていただきよう祈願してきました。

山の元自然学校では、先人に敬意を払いながら、棚田や自然の大切さ、素晴らしさを保全実践し、後世に伝えていくと思っています。



帽子をかぶった人物が、林田弘治さん

■自然環境学の出前講座・体験者、見学者を受け入れています。

連絡先：〒861-0835

名郡南関町長山一885

熊本県玉林田 弘治

携帯：090-88839-1533 電話：0968-53-2274

「生物多様性」という言葉を、

普段、私は解りやすく「大地の凸凹とその上に賑わう人も含めた生きものの総体」と訳している。人も含め、生きものはそれぞれ適った住み場所があつて初めて生活することができ、気候や土地条件の違いに応じた住み場所のユニークさによって、地域固有の生きものの賑わいや人の営みが成立しているためである。そこには大地の歴史によつて地形の凸凹（山や川、尾根や谷、丘陵・台地や低地など）がまずあり、生物の歴史（分布の変遷と適応）が加わり地域生態系が成立し、その上で人間の歴史（土地利用と生物資源利用を伴う生活の営み）が展開してきた。すると、土地とその上に在る多種多様な生命との不可分の関係、「身土不二」の「身」を「地域の生物相と人の営み」に置き換えた関係が見てとれる。そして、それぞれの地域固有の生きもの達の生活やその住み場所、あるいは風土に根差した人の営みを守り育むことこそ、それらがジグソーパズルの如くはめ込まれて大きな球体となつた地球全体の生命の多様性を豊かにする、というイメージが得られるのである。「生物多様性」

COP10に向けて — その②

棚田と生物多様性

日本大学生物資源科学部
准教授

大澤 啓志

シュレーゲル 写真：浅田大輔



ホタルブクロ



カラスアゲハ

を頭ではなく体で理解するには、あなたの住む土地で賑わっている生きもの達の暮らしぶりに、眼差しを向けることから始めるのが近道と私は考えている。

さて、生物の住み場所の視点で棚田を眺めると、①地形の起伏に沿つて小さな水田区画が多数ある、②上下の水田の間の土坡法面もしくは石垣面に半自然草地が幅広くある、③地形の起伏や暗・開渠水路に沿つた多様な乾湿環境がある、④周囲が樹林地に囲われている、等が特筆される。小さな多数の水田では、水はけのよい水田もあれば悪い水田もあり、また代掻きや畦草刈り、中干しなどの生物にある強度のダメージを与える農作業

が生育し、ゲンジボタルやヤゴ、サワガニ、小魚などの拠り所となる。周りの樹林からは鳥や獸が棚田に立ち寄り、普段は樹林で暮らすサンショウウオやカエルも産卵に訪れる。棚田は多様な住み場所を内に持つてゐることで、とかく賑やかなものである。そして、その生きもの達の賑わいは、人が棚田の耕作を続けることで保たれてきた。

ここで、これら生きもの達の賑わいの中で我々人間が暮らすということを考えてみる。まず、季節ごとの農作業や遊びの中で、日々、様々な生物に会うだろう。また、漁労や狩猟、山菜採りなどの能動的な生物資源の利用においては、周囲の生物資源の習性や季節性をよく知つてなければならぬ。加えて、様々な季節の習俗・儀式に用いられる道具や供え物もある決まつた立地や生物種を利用する場合も多い。そこで季節により毎年周回する宇宙を体感し、他者との繋がりや関係（人と人、人と生きもの、人間社会と自然環境）の中で自身が在り、その関係が今日も健全であることに安堵する心性、すなわち物的・金銭的とは異なる豊かさを持つのを可能とする。そんな豊かさが得られる環境での暮らしや子供の成長という観点でみると、棚田あるいは中山間地域とは、我が国でも第一級の場所であることに直ぐに氣付く。客体すなわち自身や人間社会とは別の存在として「生物多様性」を考えるのでなく、具体的な○○棚田といふ場所において、我が身から延びる様々な生命同士の繋がりを感じて欲しいのである。

まつざき ちよう

静岡県松崎町

取材・文：石井里津子

1枚もなかつた棚田を再建! 新たなる道のその先に



石部の棚田。棚田の合間に、腰ほどの高さの桜の木が植えられた畠がある。松崎町はさくら餅などで使用する桜葉国内産シェア80%なのである。撮影：松崎町企画観光課 山本 公

10月22、23日に第16回全国棚田（千枚田）サミットが開催される静岡県松崎町。伊豆半島にある人口約8000人の町である。伊豆と聞くだけで温泉、海水浴、観光地…華やかな行楽地を思い起しがちだ。

だが、松崎町は漁村の風景をいまも残し、鉄道が通つていなければいけないせいか、高い建物もあまりなく、乱開発を免れた穏やかな町並みは、なつかしくもあった。

そして、35ある集落の多くで神樂や三番叟といった伝統芸能も継承されているという。また、地域文化が色濃く残る町だった。

町唯一の石部の棚田

町内で何ヵ所か、海岸沿いの急斜面に見事な石積みのだんだん畑が見られた。だが、棚田があるのは石部地区だけだという。

町のメインのほ場は、町の中心部に近い那賀川沿いの平坦地に広がっている。

石部地区は町役場から南へ車で約20分。小さな浦を囲む海沿いの集落だ。民家は寄り添うよ

うに建ち並び、道は狭い。現在約100戸、高齢化率は43%。

その家々の背後に石積みの棚田が山腹を駆けるように拓かれていた。標高150～230m、約4ha。「駿河湾を眼下に

富士山、南アルプスを眺望でき

る棚田」として100組を越える棚田オーナーで賑わっている。だが10年前、ここはたつた一枚の棚田も耕作されていなかった。 「地域がまるで坂を転げ落ちるようで、何かやらなきや、そんな心でね」

石部地区棚田保全推進委員会、会長の高橋周蔵さん（72歳）が歩みを振り返った。

半農半漁の「伊豆の漁村」として

「ここは昭和39～41年にかけて道路が通つて、やつと町の中心部とつながったんですよ。それまではこんなところがあつたのかという場所だった。道路ができた、ここにもバブルがやつってきた。この地も観光地として夢を見た。民宿も増改築など頻繁にやつた。石部の民宿はいまは10軒ばかりだけれど、最盛期には46軒もあつた。かつては景気が悪くなつてもここに届く前に回復していたけれど、いまの不景気はここにもやつてきたね」

「昔の石部はこうだつたよ」と高橋さんが見せてくれた1冊の本。昭和28年発行の岩波写真文庫『伊豆の漁村』である。近年復刻版が出され、広い世代に知られるようになつたシリーズだ。この本に残された石部をはじめとした三浦地区の姿は、まさに「陸の孤島」だった。

三浦地区とは次の3つの浦を指す。石部の北側の岩地集落。そして石部。石部の南側の雲見集落。なかでも昔から田んぼがあるのは石部だけだ。昭和28年煙は12ha、戸数は128戸。1戸あたり平均耕作面積は3反もなく、「3反百姓では食べられぬ」と書かれている。

農業のほか炭焼き、漁業といふた半農半漁のほか、出稼ぎで生計を立ててきた。松崎へ行くのも1日3便のポンポン船で約30分という。この地で懸命に生きる人びとが記録されていた。

だが、道路開通が石部を変えた。「伊豆の秘境」といわれたこの地が時代の波にぐんぐん飲み込まれていく。その結果、棚田へと向かう人は減り、いつしか田んぼは1枚もなくなつていた。

復田への道

平成8年、区長だった高橋さんは当時の町産業観光課の係長がたずねた。

「棚田保全の気運が全国で高まっているけど、石部の棚田の状況はどう?」

「うちちは、もう山に返つてしまつてているしなあ」

高橋さんはそのころ、全国棚田サミットが開催されていることを知らなかつたという。そんなさりと終わつた会話から2年。平成10年末に町から「ふるさと水と土ふれあい事業」（国・県）



松崎町の役場近くにある和菓子屋、永楽堂。明治6年創業。石部の赤米黒米を使ったまんじゅうを開発。米を煎り、搗ってまんじゅう皮に混ぜ込む。もちっとした感触の香ばしい皮に上品な餡がよく合う



右：松崎町の随所に残るなまこ壁。かつては石部もあつたという
左：石部の赤米黒米を使った「百笑一喜」の焼酎を下田で見つけた





高橋周蔵さんも若い頃は漁船に乗っていたという。昭和60年からはオリーブを育て、オリーブ茶を製造販売。これも「松崎ブランド」



右：石部の棚田のなかは、大きな石がごろごろ。山津波で流された石がそのまま残っている。昔からの道は石をしき詰めてあるなど趣き深いが、車も機械も通らない狭く険しい道左：草刈りに励む棚田保全推進委員会のメンバー

を使って、農作業道やふれあい施設を整備し、棚田保全をしながら地域活性化をしてはどうかと話が来た。

だが、地域へ棚田復活を相談するには勇気が必要だった。なぜなら、棚田は耕作放棄されてすでに5～20年が経ち、そこはまるで原野だったからだ。

平成11年1月の年頭総会、高橋さんは「このままでは地域が沈む」とみんなに話を持ちかけた。「気が触れたといわれたね。この棚田は車は通らない。機械も入らない。穀物を浜まで背中に担いで下ろすしかないところ。地権者も『たいへんだからやめたのに、なんでいまさら』と。そして『オーナー制度をやっても、こんなところへ来るはずはない』と」

総会は数回重ねられた。そして、ついにオーナー制度導入を含めた事業推進案が通る。大いなる決断だった。平成11年11月には石部地区棚田保全推進委員会が発足。高橋さんは会長に就き、まずは復田に向かつて地域が動きはじめた。

「田んぼは一枚もなかつた。イノシシが通ることもできない荒野。復田は壮絶な闘いだった。でもね、やりだしたらみんな一生懸命になつてね。山を刈つて木の株をこいで（引き抜いて）、カヤの株こいで。

先人がしつかりとした盤とあ

ぜをつくつておいてくれたから復田できた。盤は田んぼの命というが、孫ひ孫の代を思つて百年の計で田んぼをつくつていたよ。これがなければ、石部の今日はなかつた。」計を見て考えよ」と先代が教えてくれる。

そのとき、先代から聞いたという言い伝えを知つている人が一人いたわけよ。その昔、山津波が来て飲み込まれて、そのあと山田が甦つたと。そういえば、でつかい石がごろごろしている。

あとで資料に文政7（1824）年に大規模な山津波が来て、崩壊し、20年ぐらい年貢が免除されたとあってね。186年前に崩れて復興されたものだつたこともはじめて知つたわけさ」

●百笑の里（ひゃくじょうのさと）で

かつて集落の命を支えた棚田はその役目を終え、姿を消した。しかし、平成の世に甦つたとき、「地域活性化の場」として再び新たな道を拓いたのだ。平成13年には、農道や水車小屋、トイレ等休憩施設も整備できた。

高橋さんたちはここを「百笑の里」と名付けた。「子どもも石部の人も都会の人も、みんな笑顔で」という願いが込められている。そして、つねに交流も宿泊を伴うよう考慮し、人を呼び込んで地域全体が潤う手だて

を考えてきた。

「10年、みんなの力でここまで来ました。いま、どのような形で後継者をつくつていくかが課題。10年経つとみんな年寄り軍団になつて、体力がなくなつてきたからね。今日も6人が草刈り作業に出ているけれど、70歳以上が4人、70手前が2人。

ただ、富士常葉大学の学生たちがあぜを塗つてくれたり、あせ切つてくれたり、こちらが必要なときに年4回来てくれる。彼らだけで年間のべ250日。これがいまの救いですよ。

最初の平成14年当時は、作業を教えてやるぐらいのつもりだった。そんな気持ちではじめたわけですよ。経過して支援の輪も広がつて、いまはあてにするようになつてきた。一度に50人ぐらい来て、50人いれば、3反のあぜつけぐらい1日ができる。彼らの支援がなけりや、この棚田は生きられないよ」

つながりが生む 「松崎ブランド」

こうした石部の動きに町内でも応援する人が出てきた。石部の棚田で取れた赤米黒米を使い特產品を開発しようというのだ。赤米黒米は、平成12年から「きれいな田んぼは人を呼ぶ」という発想で植えてきたものの。その使

し、県の事業を利用して特產品開発につなげていったのである。石部の情熱が人を動かし、商工観光との新しい連携が生まれた。オリジナル焼酎のほか地元のパン屋、和菓子屋、うどん屋などが、この古代米を使った新商品を生み出した。平成22年度からは町も「松崎ブランド」を立ち上げ、認定も進んだ。

人の思いや行動が、人へと伝わって、次なる人がまた動く。そこにつながりや絆が生まれる。その絆があたたかくて、また人が集まつてくる。

第16回棚田サミットのテーマは「棚田が結ぶ、ふるさとの絆（後略）」である。復田された棚田を通して、絆を結び直し、新しい絆をつくってきた松崎町。その絆こそ、明日を拓く何にも勝る大いなる財産なのではないだろうか。

「棚田サミットをこの町で開き、漁師も百姓も商工業者もみんなで棚田保全の認識を共有したい。『先祖がやつていたから』『棚田を通じて、絆を結び直し、新しい絆をつくってきた松崎町。その絆こそ、明日を拓く何にも勝る大いなる財産なのではないだろうか。実は、この10年を正しかったのかどうか見極めきれないでいるんです。だから、やつてきたことが良かつたかどうかみんなに検証してもらいたい。明日への道が見えるように、みんなが助言提言をもらえれば……」

高橋さんは10年を嘆みしめた。

会長を退任します

長崎県雲仙市市長

奥村慎太郎



雲仙市と長崎市で第14回全国棚田（千枚田）サミットを開催したのが平成20年。昨年は新潟県

十日町市でのサミットに、会長としてご挨拶させていただきました。大河ドラマ「天地人」の

オープニングに登場する棚田風景と写真で見る豪雪に圧倒

されながらも、この棚田を残す運動を全国に広めて行かなければならぬと固く誓つた次第であります。

農業を取り巻く現状、特に棚田など中山間地の農業は危機的な状況にあることから、棚田（千枚田）連絡協議会としても、本年1月、国の現行施策の継続と棚田地域への支援を国へ要望いたしました。

一方、農業生産の場としてだけでなく、生物多様性の場として、都市部と農村部を結ぶ活動や、また農業体験や棚田の形状を活かした灯りのイベントなど、棚田の持つ魅力を活かした取組みも全国で行われているところであります。

「全国棚田（千枚田）連絡協議会」及び、「全国棚田（千枚田）サミット」が担えた、このような活動の情報を共有し、全国へ発信する役割を果たせたことを誇りに、会長を新潟県十日町市の関口市長にバトンタッチいたします。

ます。

会長職は退きますが、一員として、今後もこの会の発展に微力ながら、お手伝いしたいと存じます。

任期中、皆さまには、一方ならぬご支援、ご協力を賜り、この場をお借りしてお礼申し上げます。

会長に就任します

新潟県十日町市長

関口 芳史



昨年、10月16日・17日の2日間、当市で行われました第15回全国棚田（千枚田）サミットに、全国各地から多くの皆様のご参加をいただき、盛会のうちに開催することができました。お越し

いただきました皆様をはじめ、会員の皆様、そして各方面からご指導とご協力をいただいた皆様に深く感謝申し上げます。

当市は、日本一を誇るブランド米「魚沼産コシヒカリ」が代表するように、信濃川水系の清流で豊富な水と肥沃な大地、そしてもの作りに長けた人々の技術から、多くの「食」が産まれています。これは、当市が誇りとするかけがえのない財産です。

そして近年、里山や棚田が多くの皆様から親しまれ、人々を引き寄せる貴重な資源になっています。平成12年に中山間地域等直接支払制度が棚田農業の振興策として導入されると同時に、当市及び隣接する津南町では「越後妻有トリエンナーレ 大地の芸術祭」を開催しました。里山と現代アート、一見相容れないですが、作家や地域住民が互いに共通の目的を持って協働しながら創作に取り組んだことが、地域の活性化に結び付いており、世界的に注目される中で昨年第4回展を開催することができました。

また、四季折々に風情のある棚田の景観は、多くのカメラマンを魅了し美しい被写体として全国に発信されるとともに、「越後田舎体験」や「農山村留学」など、教育や観光に生かされ、多くの人々が訪れるようになりました。そして、昨年からは総務省の事業である「地域おこし協力隊」により、都市部からの若者が集落に入り、地域の担い手として農作業をはじめ地域交通や福祉対策に力を注いでくれています。

これら、一つひとつ取り組みが棚田を守ることにつながっており、当協議会や自治体、そして地域全体で中山間地域対策の強化を訴えていくことは、棚田の保全や集落活性化のために大切なことだと感じています。

今年の第16回全国棚田（千枚田）サミットは、静岡県松崎町での開催となります。今年も全国の皆様と盛んな交流が図られ、棚田を守る者同志の絆を、更に深めてまいりたいと思っております。結びに、当協議会の発展と会員の皆様のご活躍を祈念いたしまして、会長就任の挨拶とさせていただきます。

事務局

事務局、新潟県十日町市からのお知らせコーナーです。

粉料理、地酒などで全国の参加者と地元の伝統芸能を交えながらの楽しい交流もついた。

情報

平成22年度の全国棚田（千枚田）連絡協議会の事務局を務めます新潟県十日町市です。1年間、よろしくお願いいたします。

昨年の10月16日～17日、新潟県十日町市において「未来へつなげ美しい郷土を」棚田からのメッセージ～」をテーマに第15回全国棚田（千枚田）サミットが開催されました。会員の皆さんをはじめ、全国各地からたくさんご参加いただき、盛会裏に終えることができました。

1日目は松代総合体育館で、地元の小学生による棚田サミットテーマソング「棚田へ行こう！」を元気いっぱい披露して開会しました。基調講演では、富山大学極東地域研究センターの酒井富夫教授による「中山間地域の農業構造改革～もうひとつ農業を考える～」を演題に、棚田を多く抱える中山間地域農業の構造の在り方についてご講演いただきました。その後、十日町市松代（星崎・蒲生）、松之山地域（新田・留守原）の棚田見学に出発し、地元の参加者と共に棚田保全の取組み、後継者不足など棚田が抱える問題について活発な意見交換がされ、夜の全体交流会では、魚沼（十日町）産コシヒカリのおにぎり、地元の食材を活かした料理、米

マに、棚田の魅力は幅広く、これを生かして、今後積極的に地域振興を図るための視点・観点について活発的な議論が行われました。その後、地元の小学生による演劇「宝用水物語」では、おいしいお米を作るために、長い年月をかけて宝用水を守つてきました、地域の人々の苦労と思いつが伝わるすばらしい発表をしていただきました。続いて、十日町市立里山科学館「森の学校キヨロロ」による発表「雪が育む十日町市の棚田～力エルの視点～」で考える棚田のこれから～」では、生き物研究の視点から、十日町市の棚田の特徴等について発表されました。最後に分科会のまとめとして、棚田学会会長である中島峰広先生から各分科会の総括をしていただき、地元の代表による共同宣言をもつて今回のサミットが無事終了しました。

場所…三越劇場（東京三越本店）
内容…第一部13時～石井進記念
棚田学会賞授賞式典
第二部14時～シンポジウム「棚
田の圃場整備」
□報告1「棚田の労働生産性」
亀井雅浩 近畿中国四国農業研究
センター
□報告2「棚田の圃場整備」内
川義行 信州大学農学部
□報告3「棚田の圃場整備と景
観」重岡徹 農村工学研究所
(コメンテーター…山岡和純
棚田学会理事／国際農林水産業
研究センター、高木徳郎 早稲
田大学教育・総合科学学術院)
□パネルディスカッション
コーディネーター…山路永司
棚田学会理事／東京大学
パネラー…亀井雅浩、内川義行、
重岡徹、山岡和純、高木徳郎
資料代1000円。問・申…〒
183-8509 東京都府中市
幸町3-5-8 東京農工大学農
学部千賀研究室 E-mail：
tanadagattukai@yahoo.co.jp

信→合否自動判定→合格者に合格証発行。
○内容・学士コース・修士コース・博士コースの3コース。上位コースを受験するには下位コースの合格が必要。各コース合格者にそれぞれの特典があり。
○受験料..各コース2000円
(税別)

中華書局影印

棚田の保全・中山間地域活性化のための全国組織

全国棚田(千枚田)連絡協議会

お申し込み・お問い合わせは協議会事務局

新潟県十日町市産業観光部農林課

〒948-8501 新潟県十日町市千歳町3丁目3番地

TEL:025-757-3111
E-MAIL:757-3111

編 集 後 記

今号の特集はいかがでしたでしょうか。ライステラス初の対談を企画いたしました。学ぶことの多い内容です。また、多くの方からメッセージも集まりました。ぜひ、読み込んでいただければと思います。「棚田の力」という見えないものをテーマにした今特集を通して編集担当のわたしは、棚田（農山村）によって、人びとから生み出される「力」がある。それこそが「棚田の力」ではないのか、と思うようになりました。みなさんご協力ありがとうございました。

第16回全国棚田(千枚田)サミット開催!!

静岡県松崎町へ行こう!

平成22年10月22日(金)~23日(土)

テーマ

「棚田が結ぶ、ふるさとの絆 ~みんなで創ろう!百笑の里~」

みんなを
誇って
出かけま
せんか?

第1日目

10月22日(金)

時 間	内 容	会 場
9:00~ 9:50	全国棚田(千枚田)連絡協議会理事会	農村環境改善センター
10:00~11:00	全国棚田(千枚田)連絡協議会総会	
11:00~13:00	<移動・昼食>	
13:00~13:30	第16回全国棚田(千枚田)サミット開会式	
13:30~14:00	事例発表 石部地区棚田保全推進委員会	松崎高等学校体育館
14:00~15:00	基調講演 演題:「農の理想郷づくり~棚田を活かす~」 静岡県知事 川勝平太氏	
15:00~15:30	<移動>	
15:30~17:30	分科会 ○第1分科会 棚田が甦る、ムラが輝く~人の輪が未来を築く~ コーディネーター: 杉山恵一(静岡大学名誉教授) ○第2分科会 棚田が支える、地域の自然・暮らし~里山の宝探し~ コーディネーター: 山田辰美(富士常葉大学社会環境学部教授) ○第3分科会 棚田は学びの場~みて・きいて・さわって~ コーディネーター: 中井弘和(静岡大学名誉教授) ○第4分科会 棚田を活かす、地域のネットワークづくり~魅力ある田舎をデザインする~ コーディネーター: 千賀裕太郎(東京農工大学大学院連合農学研究科長) ○首長会議 戸別所得補償と第3期中山間地域等直接支払制度の評価と課題 コーディネーター: 中島峰広(早稲田大学名誉教授)	松崎高等学校講堂ほか 各会場
17:30~18:00	<移動>	
18:00~20:00	全体交流会	松崎高等学校体育館

第2日目
10月23日(土)

時 間	内 容	会 場
8:30~11:30	棚田見学会	石部の棚田
11:30~13:00	<移動・昼食等>	
13:00~13:45	分科会のまとめ コーディネーター: 千賀裕太郎氏(東京農工大学大学院連合農学研究科長)	農村環境改善センター
13:45~14:15	閉会式	

<問い合わせ・申し込み先>

※ノーネクタイ、歩きやすい服装でお越しください。

第16回全国棚田(千枚田)サミット実行委員会(事務局:松崎町企画観光課) 静岡県賀茂郡松崎町宮内301-1
電話(0558)42-3964 FAX(0558)42-3183



静岡県松崎町石部の棚田(撮影:松崎町企画観光課 山本 公)